



平家物語 十八

リ 栞
1760
16





平家物語卷第十八

九郎大次判官被渡回國事

勝浦付給事

金山寺講座者給事

尾鴻合致事

奥州依藤三郎兵衛被討事

能登守每度高名事

奈須與一扇射事

惠七兵清耐水尾倉甲鉢付引切事

德野別當堪增糸源氏方事

河野四郎通任糸事

田内左衛門尉被生屬事

住吉神主長威葵團鎬矢事

先帝二位殿入海給事

大臣殿父子被生屬給事

九郎大吏判官相具生屬等总明石浦給事

宗威清宗父子被渡大給事

女院名田入御事

大臣殿父子関東下向事

義經起請文事

獨體瓦事

中三位中将日野御座事

元暦二年正月十六日九郎左衛門尉列宿義
經院乃沙可く悔りりて大鏡以て横泰
經胡后とりて中これり侍を平家八家
報らぬ迄死て神明神道よとてこれ
奉と却の如よ悔よひおて浪心よ
奉とよふ藤人よこの二三年志あひこ
うらおとさ治志とくお母見れ國とて
これより事やとさう治とて平家とてあ

元暦二年正月十六日九郎左衛門尉列宿義
經院乃沙可く悔りりて大鏡以て横泰
經胡后とりて中これり侍を平家八家
報らぬ迄死て神明神道よとてこれ
奉と却の如よ悔よひおて浪心よ
奉とよふ藤人よこの二三年志あひこ
うらおとさ治志とくお母見れ國とて
これより事やとさう治とて平家とてあ

よる國へじつひは魚——子家一人とあり
しきさう八新羅高麗契丹百濟よしつら海
て廿あおとさす八人と八志海魚——
海神を敬へ海入魚——すしとうりこれけ
る海られは海八あひうまうて三種神器
事ゆへぢくかへ——入魚——とさうの海八
り海判友宿直子海く國は大名小名家
子郎等よりよの海は義経をわがよ

くう後乃沙代友うて院宣と取て西國
へおとしく海は櫓棹のそと北は八約八
ひらめれかよ。心なまんとせじ(きもせじ)
と命とわ——み後ととわ——よさ海八人
是うれよりそさうり海く——海神よお
おて八命あさん海八せじ海記なりとえの
海は海神より八ありてとあ八と人きとう
んくは海魚海はひま釣釣のありわ

くして元暦元年二月とて三月もす
四月よとたりまきうれて秋風よおと
へ秋をやみて冬をいれんと勢あり
なりぬれ東國乃兵せあふては
はれは又いなり事ありんといしと
ころうし流しておとよりゆり
たがれ旧大後ハ故をたておれ二
浦つる島はさひてあつる

事れは流してあ入道世はさりて福
備くそりしと命よこの倉文搦
そりしと母といつる事ハ
の流り新中納言とされは故
そりしと日よりとらうし
と母と命ととがし
東國水國乃流りも
そりしと

それ契成愛してそれ頼朝よかから
もよきある國とてとさしとわらん
思しつらハそとと初めくうら
家よ大政うけてらり
とかりひしよ人あそよふより
海よひ出くか海をうたあそん
後結ふれあられな海二月十日
範頼西河神海とてくあま下向

陽道より長門國よおびく九郎
判友よしつ子に國よとす
八渡の江内忠後とて神海後
てあそらつし海をうたあそ
見おろくよりあひし軍に評定
権ありし海に陸乃軍よハ
とめそと海にすよと海に
ふみあれあハよと海にす

一、船の船は船よさうらりやとて艦船とな
とせんちかきもこかきこころとハク
ひきだらんやとハクはらふるきこ
せらやもやうせんあまかきさ海事な
了浦ハ一ひれとひく一あてとあんと
ありさよとひんきよきこく親子と
あすあつさよかゆえよりはけきこせ
じ事し物のもしあまのまよりハクは艦船

うらりやとて艦船とな
とせんちかきもこかきこころとハク
ひきだらんやとハクはらふるきこ
せらやもやうせんあまかきさ海事な
了浦ハ一ひれとひく一あてとあんと
ありさよとひんきよきこく親子と
あすあつさよかゆえよりはけきこせ
じ事し物のもしあまのまよりハクは艦船

そよみて晴笑たり枕原よりなほさ事言ふあてこよ
こゝろえられてせきめん志くをりまんとんはるは
君成ちゆらんうさひしきさゝせしつ子やれらるれ
より判友をゆくこゝろしめてつるよ港ししあひ
てりり十六日大南にけちくゆきて私とてあまこ
んとらん志こりられこの日にあまも志あつして
翌日十七日しこえん志るなよきの毎のうさし
の風た池も成わたりてりゆこりりな判友このあひ

そよよいこゝろとてお知せなほらひ枕替もなほ
ハクやしのち風ち波はなほ海のおりてよ私
のうさ事あるまじくこゝろ判友の縁はなほ
のしと忍心のあくあて志ぬ心と海河よ入る死
と志うしなほせんせの夜業やそこの時うこ
きと月を志こるらんかほ志んらんらん
そよよせてしとあふこいさしうらんをれあ
いこゝろとせえん縁はらひ枕れともめなほ

ふふく元は流人の事と云ふ流人ふ
ましくゆき判友にうそえの流り流に鑑念敵
の流代友うしてらうせんとうけ流り義理わん
とさひくくせいのまうとて胡敵れきやう
うらひまうしていくと神よまわれやとの流に鑑
三郎義盛いあらえんと志られとてと志ぬるわ
らな勢飛よまのやとて船とてすむるまんの世
六女余流り船百五十人なりとの中よ船一艘といふ

わうまんののの奥別流友三郎吉備次佐り船
岡田郎吉備忠佐り船河勢三郎義盛り船
流江田忠佐り船やう流りのののめ艘よむ
祿とれとのめ十余人とのことりり流業
へくくせ流よおのす馬一疋と神り一人
流りうくまうとら流りまんの流り流
ハあまののめよかりとてさいてまうと
見せ流りうく船よかりとて横敵系

とて二月十七日のそられゆくは後鳥福
嶋とあついで南よじつひてよりりよ
きれくは帆をあげてそりからよなり
おの地よ新してそらなれよ十八日
うまのあぢなはよるかの海上は二こ
れはうりよ阿波國八尾浦より津よ
くを治つげこれ取しあげよなむさ
このころよあついでそらしてみ十路より

あくかゝあついであついであついで
なれよよついでよあついでよ
しつせんよらよよらよらよらよ
あついでよひきりけてあついでよ
あついでよのころよとよとよとよ
下知志はあついでとあついでよ
あついでよあついでよあついでよ
あついでよあついでよあついでよ

くしを穿ておめいしてさとしらあはるる死一
義といとさくく人の世は二所ハありえ
ひまふるしはあやうきんおいてもおせ治
ち死さよりらう世て言はしああしよ
浪のかはあはれよひく捨て伊勢之部を
あしてまわらうくく八条下らうとと
あてありらあはれはひみてうけらう年
よははれよのりあ一人うしてまられと

の終りに義盛をうて一勝あもせじつひ
てかまうく敵はあはれ部をうきんあ
あうううよはを捨てらるやあはれあはれ
のともハかふとあはれとていふはれとて
のあはれあはれらうはあはれとていふあは
らあはれあはれあはれとていふあはれと
あはれあはれあはれとていふあはれと
あはれあはれあはれとていふあはれと
あはれあはれあはれとていふあはれと
あはれあはれあはれとていふあはれと

六十余行りとのそかやん成ぬせうと馳
ま路よまよそくと来ぬ成りうんぢんぢん
いほくのとのそとうらひゆら阿波國坂
あゝお見目野れ迎敷六親家しりし
うあそいふとよらと源氏のゆしこよん
うしとあひひさういせと幸よあまゆい
あしあひまいしとせしりしとあまゆい
うん 神妙ようりうりあまゆいぢん

はうりは物れくぢせえとそよ成ぬせうれ
りり棟屋しまれせいりりあまゆいぢん
屋場よ勢ハよとゆりしゆら國の伝人河
野はう通伝うぢせしととさうしとせんよ
とそ阿波民部成まうらやうし胃成
せうたおうしとそ六十余路ぢんぢんぢん
于路れゆらし阿波瀬波あ國乃浦之津
くと百路六十路あまゆいぢんぢん

屋嶋は勢八山の源とて屋嶋はいつれ
の屋嶋二日跡山あめさきよいくさふ
へ足取やわづこれより一里ありて
ゆり阿波氏部う伯父櫻と助良達八十余
諸あかかこめてゆきりれはさく人たき
せよとてさきよおいそく橋と助良達
あらよとよせし時と流る橋と一
筋といひてあらりてさく人たき

てやきいふ判友あれと八幡よといふ
とさく人の子孫に勝浦とて軍よき
とておひてあらんち八幡とてさ
はくすさ家内下らうと
かろとてさく人といふ字よ八幡浦とてさ
ゆいし一宗道書敬天皇異賊とてさ
けはくよ軍から流るよりて勝浦
とて流るよりとて判友とて悦て

ふれきく終く殿原いこころよきこころよ
つひつひつひつよは終くつひつひつよ
まそと義經つ和らつひつひつよ
うさうんうさうんうてやとものともとん取こ
打後へて懸足よなりぬあたまをの胸せ
けうらつひつひつよ阿波の國坂東坂あうら
るそて阿波と後坂あさうんちつひつひつ南
はよと陣とつひつ豊日十九日はあつひつ

て中山城うらあつ終く八陣山あつひつひつ
ふり入つた竹田よ栗守名あつひつひつ
よあまあつひつひつ大饗とつひつひつ
音謙つひつひつ大饗とつひつひつ
よつひつひつひつあつひつひつ
終つひつひつひつあつひつひつ
時とつひつひつひつあつひつひつ
あつひつひつひつあつひつひつ

かこよよゆげかかれよらりやうをんら
入てん結くこまわうととりのあくさり我
らうゆうをんをこりのあつちや慶永謙の元よ
つとて引結くやとんをうをん元よらき
結つり判友よまよ六謙の所の沙房此
新よおゆくしてとたにたあはた饗とこ
本立よえそりまへうらいつらうとてハ引く
き謙式よと結く慶永よの結く伊勢三郎

義威ハ目光をこられ見たりかれハかやと
成ぬいてとらよお記矢おひさうらとん
よのかりて親札なる式よえんも梅
ありけ謙所水房の志あうとくこえあ
かう祿とと武はりらりともえと梅
とえんをわらひあひらる饗を引とりぬ
まハ今日乃謙ハうとらりなとてう
らかりたう判友の結らるうらうの曾祖

又八幡左郎義部を貞任とせしむる
十二子のあひこ合致し給ふは六甲乃
丸臆の丸成りて甲成り給ひし
共よりて一と貞任とはうら給ひぬ
今日一人とのうら甲成り給ひぬ
きは平家とむらむ事うらむひな
一とえわらひ給ひ給ひぬ
おし満ちあり給ひて大風りやみて

りふ十九日ふきのひより給ひぬ
後小博古清基と成つひぬ
阿波國八る左子成り給ひぬ
此定て通夜中とて八さくぬ
よその給ひ給ひぬ
ふとよめ道とていふてふ
おし一人宮下と成り給ひぬ

たれよえん急がしよえんかこりらるる
わうきんよりきんよりはよこしき
はきされわうきんあのおこしき
ていほくよりりはくゆんえきより
の内敷へゆりりはとえりは京より
わうきん人のわいしよりは京捕政敵
和のわいしよりはとえりは京捕政敵
てまのわいしよりはとえりは京捕政敵

てうてはつ破子乃和あてわれ後よ破子
めさせよして破子くせて又うてはつ
わうきんちうくしよせてこしはは
登場乃城へいりちるとこりはとえり
まよはし敵うきんていしはとえり
とてはつてはつてはつてはつてはつ
てはつてはつてはつてはつてはつ
はつてはつてはつてはつてはつ

そひておとさへはなれぬまのうらみ
り待城ちくぢりぐれいそのおこそへ
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん

ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん
ちちらこつげよそえ花れ流一のそとへ
ちちりつけてりらふなそえそとりてん

抱て垣よりし伊勢之郎りりる家ハ
る大ねらんそこのみくうらしたん事
うこひぢいゆいゆ勢よりちせ
りりれ小勢よえけ城へとうなる事
の僻業うかくりせの命をれしはよくれ
ともよりりりる平家のこよ六歌のるれ
とて垣を蹴立させ先陣とてなま
るよせりりる平家のこよ六歌のるれ

ひりめよあてられて垣のあはな
二二よきりる縁こころんありりれが
とよよりこめられあふまうりり
伊勢よめうらへしとて惣門の前のは
つげりりる縁よめいととてあま
せくおのこころめられよりりる
門の前よまうりりて武若とて一
きりれあり地の山きひりるはる

滋乃きせみくよ鳥々わむはるふはる
ひらよきやくらんのかうと兒て踊るえん
公舟ふれを道なるくあそ平家のこよ六
木ふこころなは松方よじうひて一院乃
沙流ふんきんひりくは後討源のようね
とそ名ののこまははこ次よ藤為六郎惟明
合子十郎家貞同興一家忠信鑿之郎義
威と名をきてふ流うらつれてそうけふは

平家乃こころありあれや源九郎よえありける
とのとあれうてやとくももちるおようす
城とせそめうくハ敵城也よけん大と
うして焼くうひてかけおらり平家ハれ
とんくを矢よりの人とありこしきよ
りのものもありふ流乃のものもちるよよ
あやま踏めてよとくせていと流乃のり
此後後友信貞基新吾信基流乃片巻

長清經忠依友三郎長清次信同良長清
忠信と名乗て四十餘歳入長も我おと
能しと有りけりり越中次郎長清威
次り船乃屋ここれうへのりてと長清
八名乗は道とと海上とらかよ船こて是
外明より長清と今日も大おんを
多れよとと八長清とと長清三長あ
ませ出てとら長八あ風車と初らう也

徳和天皇十代乃水苗裔八幡太郎義家
よ八代代の沙弥智よよのれは中九郎
大友判友よのあくわとと長清よとと
威次り長清八長清とあらん平浪乃乱
よ義朝うこれてねるぶこれて九条院
難仕常乗う抱てとらりしとと二歳子
敬光のら舎船五丸とととまたありし
小童り金商人の従若あて長新せあうて

陸奥へまよひてありしりし山冠志事
うとをりし海軍路云部より海軍志事
此うてありしやうせん後の海軍志事
くと番りういそ真如の決らふは明日ハ
ふひ海軍志事しし心せられはてはな
せ給くこをりしんはあかくしりあ
とあしられしよまむたてこよとりこめ
られあししししを食へん事よしとありし

このともうはりありし海軍志事よしとありし
次郎志事より海軍志事はあしりて
いとけあしりし海軍志事よしとありし
とせりし海軍志事よしとありし
蛟腕しとありししちんちんは言海軍志事の
色あてし海軍志事よしとありし
こしとけしりし海軍志事よしとありし
えあしりししし海軍志事よしとありし

郎部貞一は海にせんは足敵原のさう
うんくれなきもさういふんよ六のうひよ取
しわけ日うくけんは海を去りて一はよ
て武苑さうこの初うこのううのちぢみ
はらぬよりくもるんとのととれはれ
を日興一うあひてさうゆりは海うよく
ひりそさうかこ先てさうあらはれはぬは
し海越中治部若清威次ううりのしよ

たよさうさうあさうはれそのちとて
ぬうひはさうあつてさうとせうりはれは
さうさうさうさうのうさうさうのたうと
てなよあさうあれがさうのさう下れ小勢
と大さうさうさう城をさうさう内家さ
をられぬさうさうかす神いさう一夫けん船い
くさ八層うあつとめえとて唐巻條の小神よ
はうさうさうさうあやおさうのうらいと

まへに記し置きよとひきりて内裏のまゝの
志しはけいしらはかひもひてよとてはるこしと
ゆらけよとてまゝのめりよとては奥州の
依敷の部を清次法とてかりけりとて能て
敵よくひきえしとてはるはらぬわき
とてえくはとてはるせえまゝとてはるはる
る能てはるわらぬ菊五丸とてはるはる
れよの長日とりりて三郎を清うとてはる

むとよせあはすはとておとの部を清次法
うとてはるはる菊五丸うあはれいとてとし
乃ららまの記の引あはせとてはるはる
こしにいらうとてはる菊五丸大長よとてはる
長清菊五丸うとてはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはる
かこ平うらよとてはるはるはるはるはる
のたのわきとてはるはるはるはるはるはる

入給ひされかたはよきいとてはしき御も
としてよきいとてはしきとてはしき御も
なり久松をうきやうて松のそとへき
りりやうせんものえりつるめれとやう
ふれてちんのうしられ松葉よひきの死て
とりお給つて之離るる首とひきせうよ
の死の勢え次信いしお母ゆりとの給くを
い^きたきいしてりり海八原卒れはあり

そひのうしめはな松葉のうしえかきひと
うししうし一信といはれんは後代の
めんちくなれぬし君は沙鉄末とてぬ
とんと死まひうせえうせぬわうしを愛せ
よおのひお見事とてはしきとてありと
きえん入りれはやうせん後とありてはし
あうりよ信やあるとの給ひあるとの信二人
うら給ひしてはしきとてはしき御の秀漸入

道うまふくしつらうりーしちかすこもそとて思ふ
乃六よよとつんあ物とくくさうしーり
り家うあよとくよとくわうらあもはら二足え
陸奥よりと残りーりりれハなもふりるな
了とそあハ位尉よなり後り家とあ
後よなりそ大史思と名付てひさうれもよ
き物くあんれ物とて件り溜もひけ
とそそハとんあふやうありて引せあひ

うまてかたつう孝養よくくせよとえひ
くれくれハ去ととこれと見てはあれとあ
よとれう家ととえとと心とえ後とあ
りるじー一底の大家乃言葉國と知ん
て身つ了と戦場よ修幸と結て大軍柳
城よ宿ふるそ前後れ戦よ記とる七率れ
遺骸と集て哭ーかりーと結く大
宰乃備と徳身つうとれと系結り死

去乃耶嬢これと夢て男子れ後せると
天子啼哭給て月つゝ是とまづり給
うへに死ても惡くあらしとて高直と
と感は侍徳の勇古とこれとん志義
と竭らんとおのひ志りてあられや武苑
國は人片思昔清神志とておあいてよ
これに能く志とよくひきえと子ち給く
神志とよまのの町合羽房とてこれ村と

これ志りてたまふとあたらよらりこれと
まごしと新音清巻清おあいておけられ能
登与のまの志よ内田と志とらとここれ
志よけと志と志よこれ能登とら志と能よ
かろしてと志とれもの志とさうせよらり
志とらとめとらと志とらと志とらと
うてめとらと志とらと志とらと志とらと
志とらと志とらと志とらと志とらと

陣とて下長治てりり其長年家源氏と
討よせしとてきこくくする年大能えれ
のし酒典侍殿の書物用屋の丈は東國の
れそ葛原又た良とよしの源氏陣とてい
んくまいらんまじとてようちよせう
りりれハ年家れ人ことりもきもあらん
こそ高國の人治庵治良とてしとて
そつりりれ二人のともも夫男れる

あくかひしーしとて見れハかきと
ぬれて枕よきとありきひとて
枕よきとあり年負て今長とあり
ありしとみて東おとてしとあり
れハかきしーしとてこあり
りりれハ治登馬とぬらんて我とて歌三
十人よむとてしとありしとて
大なりとてしとてしとて

吉清威次上總憲七吉清尉表濃國領人
治良と二人副将軍乃作と勅てよ
きありありと源氏乃くよハ
と序憲治良經志と澤勝三郎義威より
元平家よりゆてと夜長うらよせん
とららん一時的に阿波國
三と元より甲て大信よゆ
とやうらへ今日迄日よゆ

ふらゆのともゆてふれつれ
ものこそなるりれけ三人より
とよゆせぢんゆゆきこ
ハ村おとんゆりゆり
中一治良と憲表治良と
とよゆゆゆゆゆゆゆ
いとゆゆゆゆゆゆゆゆ

これと平家れうんの傳きあることら也
源福よ阿波と讃岐と小平家とと心おえ
氏よあろろとあふもろあろこ
山のしきまをなれとしよりかかれ長く
ありりあろろしこよりあろろ
て判友の場三百余騎もとなりより
甚介又引別て武をいそ七騎もくれ
わうせんあにものことそろの傳よ八幡

敵はあろろ子よ雲とれ後藤内花明ろ三代
乃孫後最長範忠ともの也平家
山林よろれわてはつろ源氏の伝は
あろせ孫とろい孫とまろいもこと
とろり判友の若の好おひやうれて
とろあろれもとお得うれろあろ女
一目れ末のあろろよわろせん又屋鴉の
城もそよせ孫よ平家ハきのあろろ

てゆふのやうそふも余一とあし
てつらまらむをばくそそしる余一とあせ
そあて福衣れふらひひて礼よふらそ
おとりののりひききうけむは馬よ
のりて流よむひてあめませりりこふ
やとくはくふまてふら入てんれむらひ
まはりよむみはとふ手巻よゆて
引拍えれあきえは取七取らり

ふらりはあやう矢うらくせえらよ
病の風よあけてなまよふまはる
まはるめりりはまはるはむら
そ也余一とあしと目とあせ
て海命頂礼吾國神はては日光の
権現宇都また明神この矢うら
りのあしにこふ我の國ははる
あしは腹もうりてはれは海よあ

い魚一筋に矢くらうき勢強ふきを祈念
して目減らんあけつれに病の夜爰に
さしきりつて海矢つら十二とく飽まき
引てきりしこめてしれちしれいら
つら海乃あけよならなりしとあや
まきとあめ取返しすらりあけてひい
らとと村ありあかたに夜よとあはれ
紅のあかこの夕日よか、海にそそり

ありしひらめ記するをおもしき海をえ
よとととらて白波よこえうみゆれ龍
田河も紅糸の河瀬乃浪よ敷ゆまふ事
あつ月出しつて海あきさう浪もいふよ
ゆいよひつらりありしるまよらもは忍びし
とそとまきとまじ海あはあれらとと
まけんしつらりけ真よ入てくらうとと
しのもろいまつる武志のみ十余らりなる

うあきいそいそとていりようとて三と記
はりまひいりりり奈沼余一申うん成
そつひてくひ乃や母とひわうつといきり
めりりれい海いろうう海よころうまらひ
へりれえんといりておとせ沼父とて
いりといふ人もあり半たか金くいめりとい
いふものもあり加のあき記あてゐる女がう
はりい建春門院も心難はる海りりてま

心とめられり候う當時ハ平大納言時忠
の郷の中愛の前とてりり候うとてよ
まえりり候あ女たりりれとてあゆ記
とてえいといふ九郎判友と候あけあゆ男
なれいちうくうらよせく奥よいんとい
とていりり候やこいよとていれといふ
その中よ能くも教録と総悪七昔橋原
清い下えうといふ十余人くまうのいり

れをいひかうとまのくちらうまいありと
一矢よいおとさむとくみさぬやうよ
りえちしてみれさちくくうせしれい
判友うたよふへてうらむに引のえんをん
られうは種武の胡國よ固られし事と
一頁れ城をかきくうりうはよ九十九れ城に
て今一乃城をせあおとさむとありはよ
麦母とせくあまきとそそいさせりあふ

あらゆきとあさりらむにまふと
られて十九年うま種をわたりうは事
とせりんちし事家のここのり事か
こありうれとも源氏をれよとらうり
なほこれいみしけれうらわした事家れ
しとありしと私よらうり一人うらとの
りらう一人えはき一人は三人あて
せらるるしとせてなれよのかりあ

きつてつゞき歌をよそまひに流るりか
うららんおれとらん捨てまのちう一苗
流あふくとの後二帝陰國住人より尾
倉十郎曰弥散次日三郎武苑國住人金子
十郎曰金一完竟ありとのみ端つきておめ
いてくまききよよの深倉のしじき
てあけよりくらぼんのちや乃妙の
十二とく三よせあや城よくひきえらあら

これハあ鹿屋の馬の草むよ夫と深かく
歌やそくしむ村こりこれと六姉れハあ
一とあしそひつとまのちりそぬいそ
ふいよあそこえんてかほよそそらけ
より大のねこころたぢ記あことちてえ
しをじふとよ深倉十郎三りしじふ
あひら海の大ぢ事いあこめありしやあひ
らんういあしてあむるりやそ遊うけそり

大長刀などはたのりきたまきみて在るは
とここのくお鹿骨のやよめさくら
うきんくともなつこころのうら
う遊覧ていせとくして思いとひく
深倉一とまひとまのうやうめとんく
くらほれのこよりきりきたさ
おそめむさつらばのこころを
うきんくともなつこころのうら

かきよよむか入てくりたれに
はりなりはちの男つた乃おは
ちて衣のものはさくらさけて
てうこころのうらまはさくら
らく乃くおは上総恋七昔
ゆきれこころのうらまはさくら
とく乃くおはさくらさくら
松三十余とくおはさくら

流るるの二三百人おつらうて源氏と
あうきんやと源おひてせあうやと
のとも平せあよせあよとせあひてう
源氏と武志めてうんくよかけてい
迷て馬のいきとやせあ又わうせあ
うんくよせあ我もととやせあ平家
武志めて歌のうよはととせあ
時歌よあつしげと平家うんくよ
け

流れてけちうされあうとせうてとら
うりあも歌えよと松ようり葉と
うらわうきんこのうせとら流る
てせあ入てせあうらり船の中よ
うらうらうらうらうきんのあ
とひんよとすいとあうらと
うらうらうらうらうらうら
とせあよとらうらうらうら
うらうらうらうらうらうら

よふとありてはるは國の勢とえあひまら
り侍やうをまん侍勢云う義盛とえん
て侍とて越えんぢる河波氏部成来うちや
うー日也は侍の成来とやーえまいれと
の終へにやうとて形ぬえそ十女侍乃侍
あこむつひらり日也は侍の河野とえら
にうーくれとも河野の伯父福成新次郎
下乃ことかう百六十人のふいそ切て前

よとてせてはるは國の勢とえあひまら
り侍やうをまん侍勢云う義盛とえん
て侍とて越えんぢる河波氏部成来うちや
うー日也は侍の成来とやーえまいれと
の終へにやうとて形ぬえそ十女侍乃侍
あこむつひらり日也は侍の河野とえら
にうーくれとも河野の伯父福成新次郎
下乃ことかう百六十人のふいそ切て前

しそりしりつれ和後乃ち阿波氏詔敷は
降人よ悔りりて悔しき事とす
う誅よあつけしそりりてぬと源氏世
よ八年詔を村平氏代は源氏を討る
いよよらしめえ事とす
しゆん和の事とす
まより後しよしとす
子の命ハヤうとす

されとすて二子余端の事とす
せあつとすれとす
にらるるしとす
そとわらとす
ゆらめとす
あしとす
せとす
しとす
しとす
しとす

内は藤のふととねりてさうらんよ一とまひり
これ平家八回藤のいさこれぬときこ
えこれいぬのいぬれいぬよぬれたまひり
ぬんれいぬのいぬれいぬれいぬれいぬれ
よゆり礼風よさういぬれいぬれいぬれ
りる阿波氏部も四回藤のいけさこれぬ
いさういぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
これいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ

子のいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
かろいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
さし平家八回藤と割お軍ことたぬれ
ぬりいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
ぬれいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
ぬれいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
ぬれいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
ぬれいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
ぬれいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ
ぬれいぬれいぬれいぬれいぬれいぬれ

人んりことたりたりは共ととふれとんて
六日の高麻舎とてこの苑とてのひらと
みひらとてりちたりりすれとてやひら
三月十七日伝衣の祓之長威院の沙下
くまひりて中りは十六日れせ別よ
當社乃事三の祓教よりかやう乃おと
きらしてあしとてゆりぬと奏し
もれ是法を沙劔と長威よ付く沙

神寶以下種々の幣帛とあひりて
くそまろくせ給りむく祓功皇衣
新羅とせあ給し時浮勢大祓とて
さうり乃意沙前とてく人給ふ二神
船乃そりくよまらてゆり給ふはわ
く新羅と封しゆりて一祓ハ攝津
國伝衣祓りてさうり給ふいまの伝衣
大明神とて給られたりは大明神と

若海乃ちりり母海一りり後と利と海と
あし後事うう久し一社の子木乃こ
久貴祿うひく初命ぬまれ霜といひ
は初初いよこひハあゆんよ海一もは是
人らせうう事後一社はあふ乃、國す
ハの初よこてまり後不孰方大明祿六
れやじうし乃延成の事とわはし見し
わらしあつるうのわらひのりやう後後なる

源氏ハ三月十八日長門國おのり海に陣よ
陣とそれん平家ハ門目ハ國はんのこひ
く為よこし陣とそれ勝浦引為りある
つうよんお月つる初し源平も陣中間和
つうよ三十余所なりは方浦こよりいそ
少しよつんとさる信共舟とも出れきこり
源氏乃せいのわさなれハ平家乃勢をこ
ちそゆくそれとも平家のここおも臨

同。付てきこりありありも海兵松六百金被
けり源氏乃松三子余被とありける
ゆんの浦あてやうきんと権宗うしては
こせんともう事あり権宗判友より海
八と日乃え陣ハきういともよふん
やうきんの路けるいふ一つはあはれ
こありりれ、権宗いふあまさぬく君は
ちねあそくともうくゆとくいあきん

かましくこのえちねよう一つは海代
友うしてちねとせうきも路れ和の
いしと義経もやあし事一を
南の海小と山東の道わりきりてあ
海敵十万余路くちとくせあとうし
りしと義経鶴越より身取路くち
三時よとひあう一つ尾鴻の賊とあ
と人いしれ浪風よおとれてわうり

—とよりつらつこみ被れくたして
屋橋乃城とおひお—ついまはうて
のつめりくたにかりこれえとけてうま
くう處よもふりうんとなかりとの給ひ
梶原光陣とのちみりひてい後ひさひ
のちうよひたりらけ—とをほくをばけ
はむうせん腹とてて梶原八日如一の
とこ乃とのあてありらるへこの給ひ梶原

とつりとおとこれいりよ道念殿も
卯よちうにちきこのととり不判友ら
ようらちやてきとてうらをせんこ
—と給ふ梶原と馬よう比宗あて矢とり
たうらみりり伊勢三郎義威判友ち
この給よしとんて右月の給うよひ給う
ちうけて三すいりぬれぬうあま
ん中きしんと梶原はにまてて

之よりり武苑房年々大人長月此もや
とつしはとよる能友は良言傳忠信此と
よる能友の嫡子源太京季曰乎次京言
二人ちりた志のよし此よ此とよる能友を
の馬乃はよ太肥次り実平三浦介義院
見る乃るのよしとよる能友を人ちよな
くくしり能友ハ太肥次り乃の太事と能
前よあてさせ給くくしりいささせ給

きくくしり能友ちりよ能友の能友ん
此のよしよんもれよいさし能友ん
かめくしりのよしとよる能友の能友ん
しそ能友んひん能友んもれとよる能友ん
をんちり能友んちり能友んもれとよる
およし能友んやみ能友んちり三月女目能友
教万禮の太肥次りのあけのよしとよる
せりり能友家の軍兵十万余人しり

てたうひよとてはる夢とひこし
うへに非相天とてとひききとてハ海龍
まもがうらわくらじことうかゆえとつ日
冥らんのうらひゆかりておつるまがとや
かり子家乃松の境よとひくおまかり
源氏の松のまがよじつひてとておとされ
奥の境乃とやうれハ橋原松とおうて
歌の松のうらふとてとらとてとてとて

ちうけてまうつり小長日ととらりゆらて
うもつらゆとてとてとてとてとてとて
て新中納言知威乃松のよとてとてとて
まはなれとてとてとてとてとてとてとて
ととと松よりとてとてとてとてとてとて
つらの香乃とてとてとてとてとてとてとて
ぬとのやあつ名のれとてとてとてとてとて
親能とてとてとてとてとてとてとてとて

そらんじはち筋ありていぬはしとて
ことわりふ和日記の尉ういませ、和日記
とてありらるる襦袢れうらひひうれ
よあり沈のしきあて神へてうらる
かう一のうらひよきうけはふはま
よあてうらうの奥なる新中納言れ和
とうきくいるちんはらり奥よひけて
二町あり三町はあひて新中納言れ

和日記ありて二乃記矢と一西よこと射
うくこれ中納言は矢とあしよせく見
強くは鷹の羽條羽中々ありありあて
はらりうらひはらりかうらぬ十三く三ふ
せよにまきよあり一とくあて白鳥よ
和日記は郎義威と焼香とてあてありあ
れは矢と物よとほくうらてとて
もあらる和日記は矢とあて

まゆきらる新中納言えれよを矢いり
庵ききやあるとらる子孫い海國人
新紀世に親戚ええらるりてまより
沙船の屋うへめうれて二所征無と
見はまよりて和国を良にせえさより
奥二町あり三町とた村よりよこれ
八奥よりせええいひては町あり
元村よりり親戚一家れよともう
と

和国小を良の家母といふものありと
てまゆきええかきくら積号かれと
り新和国小を良村よりぬとありひ
意航とてそく小船よ乗てこれめ
く向よとらる家とものさうめく
いふとらるれいおのそとあはは
りれい中納言^新とえ漕より船も新
中納言とえ船よとらるては方城

しつしつと後ての後々後、日本、海、明、と、此、
ら、信、と、ん、ら、く、と、ん、と、ん、よ、と、あ、し、ひ、は、
名、お、勇、古、と、し、と、と、う、ん、め、い、は、き、さ、め、る、な
は、ら、う、う、お、よ、う、た、さ、れ、も、あ、ま、え、お、し、ら、れ
東、國、の、威、の、こ、こ、よ、よ、う、け、ん、ゆ、ら、れ、の、と、こ
の、後、ハ、越、中、次、良、者、情、威、次、り、さ、あ、う、ひ、も
あ、れ、お、丹、せ、う、な、は、れ、と、り、ら、れ、い、あ、れ
お、折、し、り、ハ、大、お、う、ん、九、部、義、經、よ、く、ま、よ、お

こ、し、威、次、り、し、け、る、ハ、九、部、ハ、せ、い、ら、い、う、記
お、と、こ、れ、又、あ、ら、き、ら、じ、ら、ら、り、ら、ら、ら、ら、ら、
と、う、海、と、や、は、し、て、と、ん、と、ら、り、な、ら、れ、あ、ら
ひ、を、き、ね、お、り、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
ハ、か、し、こ、お、て、ハ、か、し、こ、お、て、き、お、れ、鑑、と
を、お、て、お、て、ハ、か、し、つ、神、ハ、鑑、と、き、い、つ、ゆ、ら、ら、ら、
お、う、これ、と、あ、ら、て、く、あ、と、し、ハ、中、坂、東、北
や、は、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、

私にこそはしるはるるにえうとれまよ
のかりさふもそしえあらんまれ九部は
ろくえ極とせむらいつれものなれ八目
うけらんあはなすくハるまふまひん
海へいらんまふまのどさうりもは新中
約えうやうのよ下知まうりて大臣殿
のち私よまのり接して日沙方れ共と
いこさうくまのりとあひえはさうひも

事かろく見くは従成良うみれりり
みくゆーやふひうらゆやと申接くた
いゆらんそは事とちれよいつこうちく
きらんまふえ一とまてはこめえしん
も明志沙みゆちりやそめせとて
波氏能成まよあまはむらん比のひ
まよあうおうーあうらいとえきこり
るは沙私まむらいは受てゆらるるは臣殿

うは威をいふつりてん権をえとく
この国のものゝまといふさうくせよ
いふへいふ母とられに折しう六お見事
へきとてそらより新中納言あられ
や頭とていともやと母とられ大匠
ゆりし折りのハちうおよん平家ハ
百金獲り^私より山麻呂最次秀を菊氏三
郎孝康つとよらせいひやうと又百

人さういひおて矢面よそらて村々
氏志んせんちんさくして告私を
逃平家ハ沙方婦ねえせあつみ
て悦乃時とて悦りるるさ家
いへうとふく信とてと懸を
大匠友小博古とめしてさ
あうりの子あれいさう世勅
食ふらう沙方悦や浪人^通い
いへうとふく信とてと懸を
大匠友小博古とめしてさ
あうりの子あれいさう世勅
食ふらう沙方悦や浪人^通い

らハ沙方とたすめいふたありとら
り候れよ平家のこと此私のことと云相
違候と知りぬらせぢくくまはかう
とせ中り候れとまて候ひらる人このれ
心乃ららこことあさし見お母れもあ
わうまゝに村志らまされていしあは
きとおのひららひ候れは志りハ白
雲やいふらんくらるり定よりまらる

一はれわうまらんハ私れも志よとら
みれれらんゆらまえてありられハ八幡大寺
のけんせう勝法とらとて判友と下れ軍兵
かあも候れ候ておらとてまら家平家
らららよこれと見えて母れもまらら
てを免り候平家ハ百餘艘とらハ松浦
とられ私百餘艘とら兵衛次秀をり一
意三百餘艘平家の一門の母百餘艘は

平家八世國九國乃共との後陣の武志
よめのみてきこめてそりに時をわん
せんとうじこわひ結られい國のもの
も源氏とよなりて平家と仲有
らりこめてうんくよ村平家因幸て海
よひ結ひよらりいまて海方とわん
しはらものそもつ我よじうひてらと
引劔とぬれくれい敵と海方と見

まけす源氏八世松とえんよ今うハせん
とらんとて鹿松よい昔し海ものそも我
武志も流らりてのせあめて共松よは
くまうれ共との結え源氏鹿松う
系う流らい共松めえとしちまうそ
むとそらりく海よ河波氏結うりちう
しそれい源氏鹿松よ目とちかき海
共松よとしちまうそと流らりとも

と村をせ切ゆせられに松と成れぬと
し居るるを捨て松のそとにわかれ
られ、源氏とれ平家とれ松は素うつり
くよとあり新中納言のよ
の居つるものとん、梅志とれも
ふなり、阿波氏成良は二三介平
家と忠とあり、度々のいふは父子
たよ所命とあり、またつるふらる事

乃神といふと、れありいふらるうら
やう、成転いけとれ、りれハ、つらん
よ、ら、成うより、りれハ、昔國成良人源氏よ
と、い、く、ひ、こ、ら、成、は、か、り、く、る、そ、ん、と、
い、い、じ、う、ん、な、れ、と、平、家、の、う、ん、の、ま、
め、の、ゆ、い、也、新、中、納、言、知、威、ハ、女、房、も、ら、れ、は
松、よ、ま、い、り、て、見、合、し、き、と、の、と、ま、ら、り
ま、よ、あ、り、や、と、の、ゆ、く、ハ、女、房、も、ら、い、く、と、れ

いふよととつれつれいふいふよととつれつれ
やろりーのめつーとまわりの男らに
はらんせんせつめとていふいふつれつれ
よとつれつれよとつれつれつれつれ
あひつれつれ二つ後ハつれつれつれ
能々れ二つよとつれつれつれつれ
八葉よつれつれつれつれつれつれ
つり我れよとつれつれつれつれつれ
寶劔

とハうーのうー神璽とハつれつれつれ
ておつれつれつれつれつれつれ
お母せありつれつれつれつれつれ
て波のつれつれつれつれつれ

まはつれつれつれつれつれつれ
つれつれつれつれつれつれつれ
のつれつれつれつれつれつれ
つれつれつれつれつれつれつれ

ちりめしそまらばむし一六万葉の如しこ
しと敵と長しき名付門と八毛をかう
せしうこと雲上の業氣つきしうて結く
海原よちりて結ふ女院ふれと水鏡一
て沙焼衣水しりしと一はん心沙神
よ入らせとりしとすしと一恥あそいしと結
り海わうくまんの部等よ海邊ある光眼
うふよとようもて河とよそまらる小船よ

のせしそまらりてあはれなりぬる納玄典侍敵
内侍恥とそりまといしと結て海へいしんと
せりよと結り海と水きぬのせえとふん
たよ付つけられて河とれり結す
内侍恥とおそまといしとせえしと結
うりも海と女院次宿らりまといしとせえ
小船よのせもてまらりて漕りぬれとハ
ーめろしと女層しと我えよと水

入給ふしつじとせむとひんこり入るを
とひつりあふは女房とらりあけられ
ておめえさけひ給ふ被いさささけひよ
とおそろす天と初き海神とひひる
うりやせんてい比年れ母とよりとお
らぬくさひさせ給てぬきさひつり
くぬすさうみとゆりくうしてぬき
とれ世年よ梅さくことからせ給らりぬ

おとけい海乃世さく初と梅さくは
人々女房とらとちぬきぬきと給ふと
らりたり門の中ぬき散登遊理人々経威元
中二人よりいぬう人よいらとあおて一
入給ふ侍下の入せ給ひるぬきぬき
くうりぬきうりかうけさきりて武士あるん
とあまいさせぬきとらと梅よ月くれん
たりたりぬきと平大ぬき時息いけと

られておらしくとていふはうあれは内侍
のりさう世孫ふものとの孫ひりれに元
判友あしきしけられは事やまこのきい
へとれ孫の武士とちりしよきいり
わうらん平大納言よ孫ていものこしく
おさめ孫ぬ小松沙子は新之儀中お資登
たおお有威りくいけちれんく乃馬
とていらくいささりらみて抱きく

一雨よ入孫小丹後侍後忠房は元守
ちよよう世孫ぬ大後殿は入んときし
孫よふかこくにちちらては方と見まん
してとていふはとあまりのみんさよ
侍りて家かやうゆえは元入そまは家
これと見んて右衛門若さひ入孫より大
後殿は右衛門若さひまて我と一つこ
右衛門若さひあけられは我もいあされ

まふか付しり家よち傳の娘ハ大臣殿と
り婚し我とすすりくしあを婚し我と
あつさんとあひてさうひよ目さう見え
あつていふあさゆれ婚り人いふ風さうい
のうよあつたものさあひあつたさうい
きあひて入いりうあつてそと家よち大臣
殿親子ハとさういあて入婚いりり家う
よくさあつたさういせんあてさういり

そらあつたさういよちり抜いあつたさうい
大臣殿とくあつたさういあつたさうい
大臣義威のうあつたさういけてる傳の者さうい
あつて引とさういあつた大臣殿のあつたさうい
て捕れ婚ぬあつたさうい子れ飛騨の部は傳の
系伝何ものあつたさういあつたさうい
あつたさういあつたさういあつたさうい
あつたさういあつたさういあつたさうい
あつたさういあつたさういあつたさうい

としらが、俗次の力よるを二よきり
しりぬ、流杯を部らしくいふて、しりそ
まりてよくいふえ、しりきよ、京経の
甲と村をせくひふ、じやうい、しり
とら、しり、流杯、しり、て、お
え、て、しり、を、しり、て、しり、を、しり、て、お
え、て、しり、を、しり、て、しり、を、しり、て、お
え、て、しり、を、しり、て、しり、を、しり、て、お

おふ、その、あ、き、平、中、納、玄、教、威、の、化
子、能、養、の、教、經、ハ、ち、力、れ、か、う、の、人、つ、ま、ら
の、ま、い、ひ、か、う、矢、は、流、杯、の、ま、き、も、や、打
物、しり、て、い、鬼、神、よ、も、ま、け、ま、し、と、め、る
ま、い、流、杯、二、十、七、あ、を、し、り、流、杯、矢、つ、れ、え
や、の、ま、き、な、り、う、ら、お、し、り、て、お、く、中、心
い、か、い、た、い、ま、い、き、流、杯、一、正、と、あ、い、流、杯、す
矢、は、よ、ま、い、ら、お、い、あ、ら、う、流、杯、と、い、ま、事、が、し

矢うこられ討流うてうらぬらてえ
ぬこみ流り流じふとのとはなぬ
こり討さりよる流者とは返りけてん
ようらり流りり我を力長りられうら
わりじふ流ぬらせあうせてあーとあ
けく物こて流してその力長りとう
らひとりてそとこみ流りりれと流打
とりて流さるる後黒うハがうれうらひ

と神と流もさるこしら流り捨て尚ハうり
と力よゆうて丸鞘乃る力や斗せ腰
よのうりう流かあとき流りり大あ
らうよならりてなふもとの流流るのこ
とひろろもて流と流ての流り流ハ取が
とらんともおらんとの我といけりりあ
て流倉よ流て流明よりあへ流るあり
そとあんでうせよとよこりり流あよ

さるものよいかいほんて海へかけ入を
入あつりたつてちまひ給へ敵と水
方と目とすまして見らばまよの判友に
れを見てしうれははひしうよりちま
九てあそめ給人よとまけいんさよな
アお世にうれしくもあつらひなりあ
れ能くもいふときくんとあつたはよの
るれあつたれむよりといはけて人およ

せうやけ之は卒の母と源氏れ矢種と流
くしてふもして天下と鎮事海あれよ
ゆへうしーのれ給ふしき事あつた
大おのれとこの給ふ新中納言の給らば
能くもやうく罪をたつら給ふとさ
よきものゆへもなりなりとの給らば
能くもいふあれはちお軍九郎おあ
との給ふこらんたれ我もさしとおと

こと九郎りんくしんせいのと一してあ
ひつきて年あじとかりひはふは能く
と判友せよせあらしは事なありけ
るし能くまの鑑甲よ小長刀りらてと
ましり判友とよりひつ物よ小長刀
あてありりはよ能く判友とらんく
られはしれら乗うつり捨て艦より
舳まえに遊鎧はふよようはれぬと

らんくまのやうせん長刀りらてと
みくえしはれは船廿八尺あきり一丈り
の尻をばよゆととひは能く
しやまのやがしりはらんはひく能く
らんかば事二とありりり甚なは
らん人せしらんそて面よしり
せられはれよ人もよとせあひ
てらん入はるりはれんとてらん

やうに打ちふるも海女獲ちる子孫ゆく
なりれどもと女獲大領の子母女獲大領真
光也さうり海大町のさうれまの海身よ
かもし思ふさうりもの二人さうりひて三人
の波一かしてゆく海といふや海女後よく
まん一人はよとれいをもさうりつあつ海女
等三人さうりつ海さうりんあはきかけ十丈の巻
津なりともさうりい海さうりい人さうりい

さうりんとて三人小船よきて海さうり
の船よ被よ小船心船とかがと海さうり
お物よと海さうりかがり一人さうりみる
海さうり後よとせあさうりて海さうりい海さうり
けいれ海さうり二人海さうりい海さうりい
よういさうりみて一かあさうりて海さうり
こりいさうりあさうりいさうりいさうりい
あさうりいさうりい海さうりい海さうりい

母をなみ又とうみかさうりたり新中納言
らんき事いん流いちはうそしあ
あのや流いんもあうるものもあ
れありされとて乳母子の伴契年内筆の
部長とあしてうよ部長やいん
の流いんあまうそいんあまう
頃ときせうそらうそいんあ
流いんあまうそいんあまう

る流いんあまうそいんあまう
ひのいんあまうそいんあまう
うりにういんあまうそいんあまう
いんあまうそいんあまう
か余町あまうそいんあまう
いんあまうそいんあまう
くうていんあまうそいんあまう
あまうそいんあまう

さうりてんまのあまりにあつそちのま
あてのうんれまこまそこのま
すれハすれあてのま海のま
引入るままれハま父のま
てのま切てまれハ大いさ
まそまはまそりぬそ父子
海上一里あまりがれてま前
まそあまりこれれまき
船のま

ゆれ風よまこひてま
まあまらま海よまら
ままの吹まま
ま愛してまれまよま
いけまあは前内ま威ま
清門ま清宗八威ま
ままりま平大綱ま
ま位ま渡波中ま時
実ま歌ま柳ま

母は二位増部全親中納言津師忠枝
經誦坊阿闍梨祐常より母は肥後守
貞能源左兵衛判友季貞掃部判友威院
橋内右衛門季康女房母は女院宣衡女房
大納言典侍人より女房九人ありて
いげより三^十人なり二位乃中より母は
去りて孫ふ人もあり一日も見給ふ事
甚夷もものもかりて越へ海路ふ所の

しら玉服着る夷よ因て胡國へ行くん
かれし見もいそこれ母は海へ行く
七和丹より海へ沙門更祿乃日八晝時沙門
乃由志より母と夫喰やより夜の沙門の
沙門のうらよ鳩入新沙門後乃時ハ三沙
厨後よ女房母よ老とえ入沙門乃日八
百子れ懐れ前よ夫男より長沙在後三ヶ
年よりあひいり愛地天よりつて三ヶ諸寺

詔社より恒成養と為事のまなりと云夏
は旱魃秋多ハ大風洪水東地ハ量成致
光ソ人ともあ牧乃勤あとおよソ凡三月是
由きてハ春苗の秀あそくお母は横也九月
よ霜ゆりて秋もあくう心一秋穂ハ積
せす一してあけら乾天下人民餓死よあ
ゆも門くよ命ソ凡うりものと穢代相傳
の恒而と強くさうひをうて宰人あり

てん成々こ記穂成との里よみらこ浦
くハ海城開く道くあは山賊東國山國の
合戦騒動天引時飢饉疫癘大兵乱大焼亡
二変七難のこ為事なりき貞觀の旱水
祚の風上代の事なれともは沙門の沙門
所々の事ハ何しともなる春は旅はハ旅家
王う子女はあは祿とも呂不韋う子なり純
白下と持事廿七年ありきあはハあは

人乃りり家ハ其國よハかゝる家ありと
ありりり重華とヤ沙門是氏家よりあり
こゝそヤーの高祖と大公れ子也云々も
位よ即そよりき不胡也人位れ子
て位と張事いさうも後くすとれ
り為元曆二年乃其書いさる年月な
まハあや一人海中よあらん百官派の上よ
めよふ死ん

元曆二年四月三日未刻ハあり九既大入判
友義經位と院ハまゝしてヤり為ハ五月
女日長門國をんのもつ司同めて李家
のりもかゝる忠いけよりありて三種乃神
器事ゆへくかへー入させ給ふへーヤ
そりりれハ上下悦ありけ源ハ廣總と元
りり為廣總と源前よめして合戦せん次
才りりりりり約ありり感のありりり

良書傳尉よめし作られり目な紙少
ゆきんのあひくさ少向ふ下稿友判友伝威
と西國へくしはるす箱亦へと久ら作
やそ鞆とあけて沈々りもなす六日九
良も先判友いあそりさくともひくして却
へのりは情戸國明石浦みそまらりもなよ
夜の涼しきまよ月をよぢくして秋の元
もとおそくさりり満の浪とさゆりて

女房をしら加しらすはらひてあひの
よぢくさぬま物あられなほ色き紙
のこもをれしひ祢なりたれはさしそは
ししとあ母しけめなるよと師曲の友
はくしとあ光接ていとお母しあし
のこは事ありたれは枕もうふはり
あしとあ母しそりたやとりり月よ雲村の
雲れうあがしあかき思月けはしあけてし物
し

本三任中將少方

秋男とあり此はうよふに秘せあおのめりもやうの月ひ
やうららと見え給ひたりりよつさしとおろし
くそじうしと急しかりしあありしとあハ
れよきとえりり

昔小野天神大宰前よ遷給り侍りしこ
の初よとてまはり給りたり侍りよあし
とよ明るれ浦の月みれと給りたりたしと

くり侍りしれと諫し給り侍りしあらの
中とくやとえてあしれたりされとと
それハあ男一人の侍事たりしとこれと
こしとじりましとあしとあしとあし
人くハ盛乃みらりこたりしと給ぬ百官
浪の上ようひ子家れ一門ハ筆長よかこ
まれ國母宿女ハ東夷西戎あかこまれて
おろしとあしとあしとあしとあしとあし

きあとのらんして為さるるを接ふはれ而も
あつりけれは事なくいふよとせしむるやとせし
けしめしむるせめてのれしむるあり
よ月よ雲妙乃おこりせよとくひにす
こみ接り候えあつれは候九郎大夫判友
東人ぢれしも優よとんあ候お死して
物あてふは人ぢれはあよ入くあ
是あはれあひ接り候

同女又目よ内侍取神璽鳥羽殿よ流しせ
給多りけれは勅解由小治の中記云経房
高倉宰相中将恭通権右中将兼忠亮人
比磨門権依親雅授兼中お公時流すおお院
能治じつひよまよしけれはとも武吉よ
八九郎大夫判友義経石川判友代義兼輝
豆花人大名頼通曰比磨門尉有徳と云く
し子別先右政官は廳へ入せ給ふ内侍取

凡乃此箱内とせ給ふ事ハめえたるは
寶劔ハうせよるり神璽と凡乃此箱と
海とよきより心と夢陰國住人片思
右郎經春よりあけをえまよりより
とそなる神代よりつるり多氣靈劔三
より草薙劔天蠅劔十握劔とれなり
十握劔ハ大和國のころるの社
こめつは天乃地所劔とハ元ハ羽と斬
乃劔とるはとやけ劔のみれうへ

あつは地所の自ら所とすといふ事なり
それハ利劔とるりより蠅劔の劔
とるりはよりけ劔ハ尾張國饗田とよ
あり草薙の劔とるり内裏とるり
代々乃沙門の心守なり即寶劔とるり
あれなり首素盞爲言とるり國素戔乃
里より交作とるり始とるり時其なり

八丈北雲つひりしはれひきりれハ言ハ
魂しそあくと祿せそせ給り侍

八雲つひりしはれひきりれハ言ハ
八雲つひりしはれひきりれハ言ハ

此れハ大和しそこの女一字れしめなる國

成出雲と号し侍といけ故とそなる素直鳥

言お雲國ハちりしれ給りりる女其國ハ

穀乃河よれ山より給りき村南村山丹

哭し侍給りし給りれとあやしそなる

乃給りよ一人れ是翁老婆有其娘十三人あ

十三二人ハ言ハしそ大和乃食よなりぬ一

人の娘生年十三よなる容貌人よ此れ

よりみそハ高福田娘と号し曾波娘と

りり大地乃まんとも侍ゆよなりきり

とりりれハ言ハれとあしれと給りて此の

ひめ娘よ給りせとんやとの娘ハ命といけ

られそそまがりそんよハいそとそそ

まゝのくまとしてかの曾波姫と云ふは
ゆかりの乳をらばよき娘よりりさる
くせえあそまらりて湯作の妻娘と云
ふよりあつてはとらるよき娘と
きこしの父お雲國義貞の孫り長者よ
てありりり名をばも摩乳といふ母毒は
ハは摩乳といふあは長者あつありれ
を八醜の酒とハ乃母よとて一はを大
地乃あつはうん乃心恩よそそそそ
てそのうけと酒杯の座ようつ一娘あり
りは母大地きこより尾取ともよハありせ
あれよあは若いとしてりくは本初ハ
より眼ハ日月の光れこき一年く人との
心事あそふ事と云ふ信あれり
よそ村南村よは哭しは絶つてえより
りり大地ハ乃頭ハの尾ハ乃岳ハの首よ

菊のひこれを以て酒とみふは八の船より
つり給ふりつれ八大地に於て飲とんで酒と
のこをまろふんと八の船八の船は各一箇
酒舟と藤入て飽まへのこをまろふ
つりその時素盞鳴鳥言草給一家十粒の飯
をぬいて大地とすこよ切給ふよその尾を
つて伐せす割て見給ふ尾の舟舟一の
飯あり是神飯なり則天照太神なり

献了はく我天岩戸よわらふとりあり
一 時近江國伊吹ヶ嶽よ落しつる飯
なりとつるれつれ八伊吹大明神と
ハふれなりけ飯大地の尾よある時常よ
黒雲初つし故よ天の村より又飯と名
付天孫より下給し母天照太神三種神
器とつりけ給しその一なりじつあるの
鬼神よおられてぬらふよいとよとにけ

のひははるもぢりて改よかこまけん
志多れハ懐より毒根とより切てうら
よきよりれハ鬼神おすして海
よりの素盞為ると是と何し
してかの依と湯津乃毒根よ元成迄
ひり依よや命ハのひよりの素盞為ると
少戸ハお雲國杵築大社少戸ハあれや
け村のの劔ハ天也まれ伊勢宮より後よ

葦原乃中國れよめて天孫とくした
てまより後よれけ劔と伊勢よりて
献給りり代々帝之内裏よ崇置迄
り依と宗神とよ皇伊勢宇大子よ靈威
よおとれて天照伊神豊劔早姫と
命よ授てそまよりて大和國是純村
城ひらひらきようつしそまより時
草薙劔と天照伊神并劔なり給ふ

後時石凝姫と天目一箇乃二神乃苗裔
ありて劍と鎧改て此處と云給しよりと
志願よありおしり給し草薙の劍是
宗神天皇より京河と云是ましく天照
大神の社檀^{なり}ありあめとくれあり
り心と海にびくの目代目一の明れ沙字に
十年小東夷叛逆の事えあり名日本
武尊沙字とかりよはらうととせくれ

ましくくれハけと東國へくま給
よ。伊勢太神交へまじりて和姫命
りて此のまけりてせ給る小宗神天
皇乃也時内裏より納まし天徳村雲
此劍と倭姫命よりて日本武尊より
けもあり給ふ言これと給て東國へおと
じき給て後河國よ流記給ふ浮橋
くくく其國乃賊流給て氏野よ康か

初もく天智よ養一はるふはるよ
沙牟三才を薨落て白鳥せなりて
西よりして苑よりはるは瀬波國よ白
鳥乃明神より八日平武言は事也
草薙劔と八尾張國發回社よ納まり
とるしと天智天皇七年よ新羅志
沙門道鏡ふれとぬとこりて新羅へ
とるは浪風あつてそらも化よ海

庭よ没ぢんとす是靈劔の崇なりと
波劔と海中よ没つ龍と是とのせえ奉
献と天智天皇元年一尾張國
發回社へとるはるはるのこはる陽成
院相病より没されはるはる劔と後
はるはる夜の沙劔ひくくしてい
つらのこはる恐怖て寶劔と抱はる
はるはる白くくはる霜よこはる

世に世よそあはれをかりこしありはれ乎
家奴て都のあゝかほ二位後藤よこし
て海よ入給とも上は給ふはぢしは
うすんき末代こそ心うはれんきとほ
あまよお母ぞてこれとほあせとほ
いとほとのとあしてしとほとほとほ
地祇よ幣島とほとほいのりふは秘法お
こあられはれとほとほの志ほしぢし

龍神これとほて龍文よ船てはれとほ
つわよお母とほりらり
時乃有祇のりこれらるハ八幡大菩薩百
五鎮護の沙らふあゝとほとほとほ
あれはれつれとほとほ天照沙神月讀
言あきとほとほとほとほとほとほ
とほとほとほとほとほとほとほとほ
とほとほとほとほとほとほとほとほ
とほとほとほとほとほとほとほとほ

り海ハじう一が雲國素盞爲言より
あらされもる大地靈劔とあり心執
んぬくしてハ乃ハ尾標本うして人五
八十代好八輩の帝よりりて靈劔より
久して海座よ入給ふともと九重乃
倒座の龍神の變こなりよりれハ二
一人回よりらるともわりなりと
そ續りもる二文今夜亦くいり場と

り一唐院より水むひよ沙車とまひせ
ら海七条待後法清沙法よはられもる
七條坊城乃沙母波のりらとて七條あ
る成り一の事あり一徳の君よとえ二位
殿のさくく一見く一まいしせられもる
なり於よ海一ちさハけま一と沙法よ
はうせと一海一まのりりる海屋路事
なりとも一の比運のめてそく

ゆとらそは乃人早ら海由りては縁の
元よかうせ給て浪の上よ三とせ成す
こふせ給ふれハ由母成七少乳母持明院
の宰相とあ母つうなりて悪く見おのひ
きそえちりりはくはは由うゆより安祈
りいしちじしんともかひひははよ安穂よ
いしせ給ふりりれハ是もてくれと悦ぶ
きしてとりしきしははけ少子は今年

七歳よちうせ給ふとえちまろは月廿六日
あは内大臣下平海氏のいけとりとて京
へ入八葉の車よのせもて前夜のせとれ
とあけたる心物見とひく内大臣ハ津
夜とえき給つる少子を傳の持信宗少年
十七三ろき車意きく車ハ鹿よ乗給く
了季貞成澄馬あく信よあり平大納言
和氣しきくやしはく子息澄波中納言実

同車してしるこふ人きあくありらるる見
可方なりけれはもこふ内苑に基きす
とかりゆりそりけれは困道より入より
軍兵前ねたるよしもためていへるさ
り事と云ふ信雲殿のこころ一内大臣
ハ以方とんまりしてひくおひ入給つる
少くもあひひこころと新やうよきけな
り一人のあはぬよのよチロロ夜裏給つるハあ

これなほ心傳ひ給へう流して目と見あは給
り給ゆくおひ入給へは氣分とせせんよ
思ふ人却り内よとかりしを在國也國
少く寺くより老くあまきも集て鳥
羽乃南門北道に塚よほくうてこれとる
人ハかりしを事と云ふ信車ハ轅とめく
す事とるし佛乃水智慧あ成ああ
くく派承養和の飢饉東國也國乃食

我よ人のうらみ死うせさるるにありふらば
お母よりうらみしを思ふに故と為給く
しつらうの仲一年たりま下よ。回ちの
き事なれはめえさかひし事とて
も信今日ありて海後まがろしは
うらみとのおろちなれおをしは
乃とありのめよいふなまて海と
禮成ちりぬいぢりりり海てみれ

ちつたれ神の流てよとからしん人のい
らりの事おのいふを重忠志ん
かうゆり親祖父はよりつこりき
ことかるとおしんこいよお母く海成
よつたれとてしんこいよらよみ
おうらま代お和とくきよあはれ
しつらうのうらみとてしんこいよ
いこしとてこれハ神成かりしあそ

目に見えぬものありあらうや今
目内大佐乃車屋りつる牛飼ハ本曾之院
衆乃時車やうそ門とてししそりし
孫は丸うおそこの小次丸なりりり西
國あそいりそよ男みたりてありらる
今一ふひ大佐殿の由車とや能いしそふ
心持うかりりれハ鳥羽あて九郎大判友
乃前よとそみおて念人牛飼あそりし

乃を下臈乃とてあてんあそきと乃よ
てととつらふと年暮とてしそられて
世のふしあさうと牛飼とそらふ見え
し大佐殿の死後の由車とつらまつ
つやとかりひとこぢくつられハ九郎大
判友あつれと結てあめらハらふし
うへにそそゆらとれよらり牛^キとそら
悦て尋常よそりそらりえきて大佐殿

卿と殿上人と日とこれとまうめ死
てもろくしけ予大納言時忠は帰國と
てとりき院沙不とてくめて衆は
不した沙前へめこれ給て沙河公に給
てめてさうらう事れくかたし
そられくおひく大跡と和くては
大臣後父子九郎ち久判友の袋不六条
浦河よとりちり物まいつとくひられ

ことゆくとそえ給ためひよ物は
の給くとも父子此目と人あを給て
ひまめく渡とえ給く給ひる夜よはれ
しも袋束とくわらけ給くす此神とこ
しきえう神給ふを傳の巻と寝給ひ
そりお給と大臣後沙神とくきせ給
ひら給と源八根舟を良江田海と給ふ
あつらひちりちる若たこれとんて

あふいとくやあれん終く父子此旗幟を
りむんなる事いとちりりくれとて
極とああれそと神ととありり
建礼門院八束山のうく衣田此頭（おとら）は
取もそくち入せ給り中納言法橋を
こりりる奈史法師入坊也なりすん
ありしそくく久くなりよくれ庭よ
ハ草子考くく好あは志のふちりりは
絶

福成あつハあそ由風となすはくも
じうハ此れ巻紙磨き錦の帳も由
こつれてあつ義一給一よいまは
ありとあそ一人くあはらぬもれそ
阿さま一苗あは朽坊よ只一人産法
給えは由心乃中乃のちりりなりり
の福そのあひなりりあそりはあそ
らとこれよりちりりよなりぬ心

あよいそきえ入屋うもそお母しめされ
うれもそみも色しととんて居うと
れくよあうりもなうしし鳥の業成
らあれあうりとな成うあう浪心
と和の中う也とまひしものは恋し見え
お母しめうおが何しとこのみくら成
ぢりぬくうしし鳥のせえての成みの心
くひよお母そまうてととおが縁ととが

ひそお乳天上徳お衰のかれしし人
よとありりなとのととそお母しめ
ありせうれあう四月女七日前^共を境依頼朝
後二後しし後ふ前内大臣宗威追討
の勸賞とそと実えし越階とそ二階
とと海しう格ししき別思あくあ海
しえ正下乃に後ぢれハしとそよ三階な
しえ例ぢれ事ぢりり今夜内侍可た

政官廳より温明教へいしせ給く初幸
なりて二箇夜時徳沙神樂あり
長久元年九月永曆元年四月忠例定
我安えし右邊好盛しこ此好方別
物成水事家母流こりし徳場立文
人とい神樂徳秘曲はて勸賞かうじ
里ししとやうしこれけ歌是好方う祀
父八条判友資忠より舞人忠心布是

これ傳とのあり後よ資忠海川院丹
こつげをり子遊方あつて人しとて失
よ若海と内傳和の沙神樂と初こあれ
り傳よま上沙卷乃内よ海しこ
拍子とこつ勢給つてと方よおしこ世給
りり希代の傳事とまこじしより
あり傳父よ新しひをこじよれ徳神の
るやい巻し記みあしこまえか傳めん

りくそがこころ清くしめてこころれ道と云
——こころ清くしめてこころれ道と云
のりこころ清くしめてこころれ道と云
と云——こころ清くしめてこころれ道と云
て清くしめてこころれ道と云
大神の天の志をなす——こころ清くしめてこころれ道と云
こころ清くしめてこころれ道と云
水鏡なりけり家子孫このこころ清くしめてこころれ道と云

我と云るうこころ清くしめてこころれ道と云
と云——こころ清くしめてこころれ道と云
こころ清くしめてこころれ道と云
人代よ及神九代をいふ沙門同此天皇乃
沙門と云る内侍なりけり沙門と云る沙門と云る
——こころ清くしめてこころれ道と云
皇代沙門と云る内侍なりけり沙門と云る沙門と云る
て別殿ありけり——こころ清くしめてこころれ道と云

敵りしをすし〜く家遷幸此後百六
十年と経て是上天皇此沙宇天徳に
年九月廿三日子別。内寮中交談
始て焼之ありき大内侍門陣よりお來
若れハ内侍所の温明殿と稱ちりかき
く海上也法夜も此事なれハ内侍と
女官とまじりあはすして賢可ととも
〜〜〜〜〜小野文殿といきまよ

いせ給て内侍所とてよ〜せ給ぬ世六
かうよ〜とありりれとあゆし〜と西
後とちり〜せ給り家福よ南殿の極のま
楮よ〜と給せ給りるり光明かく御と
〜〜〜〜〜山々端よりお〜と〜せ
ハ〜〜〜〜〜と〜と〜と〜と〜と
よ〜の也〜と〜と〜と〜と〜と
〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

天照沙神百王と海りてをえまらむと
よみ出らむありその出らむあり
給りす八神鏡實頼り神り金とりの給り
沙洞のとも清いまこおこつさ海よとひいせ
給り出神よはみ給りて沙えとまひ
群せて主と此沙を可大政官期可く
我初こいよまひる給り給り代り人今うを
よそまひらむとかりひもく人されは

まい海と魚見出かみと入せ給りま
上代しえめとこいれと水よと母れ毛もら
てえ初母えり海平大納言時忠を子瀬波
中お特實九郎を久判友の宿新らくと
りりり大納言はひらるをけき人あてと
まいれハカく世れならぬ家う人ハとえ
也かしてとこ初母とくまよは成いのられと
い見とこいあらまや沙子乃申物よの

終り候ハしせんは心らら居りし事
の故勢と一合判友よそれとよか
れ物とともか海々よ思てハ人か得ん
こねぢんと我君もいけら候ましと
あはれ終りれハ仲おの終り候を判友ハ
とあうけあるとのあてはぢ教せし
終りまして女層々のしらえぢけ
く事とハいぢ候事とていしあはれぬ

と申ありあはら候しと
くぢし世終りしと
なうけしと申しと
くれと申せありしと
沙路よと申しと
よえせんといふと
くぢし世終りしと
くぢし世終りしと
くぢし世終りしと

およそ信じて當時乃水方捕典侍殿の依
版よ今年十八おなり給くるひめき見
のち乃めおしとていづれは見状あるを
——くるとと申おハと母——はととれ
とハお成大納言とて見おが——はれを
先乃水の方お版よ女ハ——おり給ふ
とて判友よハ見おしれよはるもてすこ
——おとれ——とて——はれとも信けよ

清かかめて由いづれ——書父ありと
お版のちお人よとてとて——はれ判友
よりおしとてお版て元の上河越左郎
を頼り給ありはれもてはれとハ別のこ
為常よとららひてとてあはれはり申お
乃ららるひとてとららる大納言は
事とておのめおしとておはれとてはり
かの版お乃とてとてすして年大納言

乃重たふし一はうハそれより大納言悦
ては下れうらめては乳焼とてそれ
りりかたはわらふ事とてきお乳給り候り
日記もてたありり候り六月一日建礼門院
此うしお海子為給ふ此戒乃作ハ長樂寺
阿梅房上人平あしとてまへりし此南極
ハ先帝此沙迦夜とて取し上人これ
と給て何とて事とハりこりりこれた

源とたりしとみ深乃神志は中やえ
帝海へ入せ給ふとの朝まてなかりり
これハ此うつり香いさしはさす此とて
とて西園よりとてせ給りりやみんせ
まては此身とて乳とてとて取しあこれ
これとてはをよなりぬ色にわあ
うんりの此下とてみれをあしとてちくしり
しこを給り候り候りき平西上人命

至夜と結て女院乃らみらんせまうてと
えん帝乃れいこんとおんしめしめて水
身とてあれをせとりしあつたりしと
結よりたれともほの沙わこいひのこあこ
てとりひこを結て女院乃らみらんせま
まよりのしめてあれは至夜とりて水
情と裁絶し結て長樂守れ帝の
よりけられそよりり女院乃らみらん
なうしうくさひ乃れせんらんなりたて
海れそよあつととりしあつたりしと
うくよよそ結て女院乃らみらんせま
し結て女院乃らみらんせまうてと
あひわしとそよのしとあつたりしと
それら女院八年十月あつとあつたり
結よりりしとあつとあつとあつと
まき十六あつとあつとあつとあつと

侍下作一給てありたるハ朝政とす
たり夜ハ夜とありし給ふ女ニありて
皇子沙汰しありきりしハ皇太子
とて給ふ春宮位よつる給ふ六女
ありて院号ありて建礼門院とす
大政入道の水娘のとて下れ國母とて
一海一ありハ世ハありくありて
事ありのめありとて今年ハ九九ハあり

給ふ桃李乃よそとひこもやうハ芙蓉
れ也下下をいませとありて給ふ
とハハ翡翠れ替つけてと何ハなせ
とせ給ふきせれハ沙様とて給ふ
き世とてハ海とて道よとて給ふ
也也也ハハやとありて給ふ人ハ
ハかりとて海ハ入給ふとて給ふ
也おもけいのありてとありて

とをせ給ふ魚に露の命とあらしか
とていましてきえんやうさうんとおぼし
きうつげをせとりしきうきうき
のこせにありを給ひの六月のみし
夜なれともありしをせ給くうら
まうらまを給事と名もれハじし
の事と後よこよは浚せすかうく
うらかりよとむけはうらし大れ給ら

とよよとふくさる意と打給夜のるむ
ち因かりの上陽人の上陽文よとらされ
きりらんふしきもきりあれハじし
さのれおはさうりらんとおぼしあされ
じしとちのお書とちとそやのあ
あしうつしうらんけらうれん
そら氣乃ありらんは鳳ありしは
あさうらしとけらうくおそつれ

これハ世後と云へん揮^ニせ給ては硯のふ
しよと云ひすまを給るる

時鳥歌より丸紙書とてあてはくはむ此のや
女房より二位及れ亦たされに極みれりこ
よきりの給りひいものぬのあけけり
もよとされ給く物るさくくり給ふ
はさるれ申とていふれてあはれなり
わりきと云ひころとられさも誠くすこ

と屋りしつゝあはれもとあはぬ有る極み
あひいけぬいよれとて思はれさよよあ
しつゝし給ふとれつらつら思はれな
まし給とるやうさなりしつゝ心むか
しきあしものころりてあけき給るこ
しつゝさしそしつゝさもあはれなり
し人のとひらるものぢし地勢よりぬ
せく七世れ給よあひつらんとかくや

ありらんそそお母えー

お之後中将重衡乃山方ハみ条大納言邦
總郷乃出娘せんていのゆめれとあそ大納言
典侍とそとりーき家ウ守衡郷一宮まそ
しげとりよせられて重入のなり孫あり六
山の方旅の元よあゆりき人となして
くぬしとちを死娘くももえん童よ流
きとくまーくーくーの西國よりのあり

て姉乃お久三位よ日家して目野とふ
取よとりーく家ウ三位の件おと露の
命とあまよすうりてきえんやうとそまき
娘とれハうあしてのうよーとふん
君くゆすハれとあがーとれともれと
ハあけちくうりのゆめれちくまみちをて
あーくーと娘よとえんそえーいまは
國くとちりまりて人のゆめとわつ

ひつしと徳一とれ八九部判友斗後子の
人しとあられとて東平れとのとと平
ととり悦あつりけ事知よくこれ二位後
きく結くぢふ事う九部ハ志いししゆ教
言名ぢししゆ也かのう法是れは常法をゆこ
ししゆこの人乃世あてあてししゆ
しよとまきこゆ頼朝のようくううひて共と
うしのかとれハしと平家ハつらひ思れ

九部ハりあていざと世とハ志のひゆ記
く人乃しゆよあつりて世と我まこよ
あひしちよしと下てとささこめするが
の事こつらんしとらんいつう人しと
あゆこれ平大納言とりてあつしゆは
とらけられとせよおそれととあつは
平大納言九部とむこつと家とい
れぢしとそこの結く家標いけとり

母人うらら八歳の童と志保一を
ハ大後友乃し子れ着君れは事之方
着志と産産結て七日と一ようせ
結よりり少方よハひきりなりて
の結り体ハ我うらりかぬ家よあ
はよりひわくとハはれハいつあ
よとあれ結て子とまうけ結
け子とはあくまて我とみる
とわは

も急めてとて結と一ハは左
つ巻ハなせとゆつりお筆とせ
とて名とハ副お筆と付てと
方よたうと一ハよおのひ結
とく事なりと志保乃山やと
ここれとと一とてと結よ
りお事事あれハとて乳母
とやり結とと朝夕も急めて

後よりおひさしに後ふまよハ大臣殿より
後つて出さきいともわりあつりりれい
ぢくふりーに後つり三歳よぢり後れ
ハ冠一後て徳宗とそ中より徳宗を
大將軍徳宗ハ副將軍とあひしして後
神よの後れハけ副將軍とあひし
中より西國の旅よそよりあひるさ
とあれ後れぬよらん乃浦よ軍敗よ

一後ハ若君よそい後れす若君よは
九郎判友れこあうよ河越小太郎を
府のありりあつりりれハ其家よ
女借乳人女房二人えつけりりる
りあらんそらじと女房さ若君と
あけてあけてもなれてもあはれ
り大臣殿とあひしあひし
え見後れいよかよ後れりりり

とと九郎判友あひうして六条堀川
夜下とうらかて岡東へくる大信後の
少子ら信の智信宗源大判友季貞章
信威沈はとて信とをきくえし大信
後武士とよひてけおさぢ乳者八母とて
へあそゆるあひんあし給へとの給ひも
あしと信なりそこもみり着るは河
越小右乳を序つあつしりりる信とて

序八岡東へくりゆへわきみとは緒方
二郎惟能うりそくまうせ給へ
しとて大信後乃少夜取り事
よのせしそまへ六条河原へやうし
あま車とらあて志乳をそしきえ
うれしとせ八女指乳母れ女序日あて
ん乳しとそまらんそんそあひまう
なめ乳事おれともうあつては

人目と志し居こはらうやとみ記りしめ
若志もあやしむにわづらひしり沙
めのののが船玄のつやひしうきみとこ
きしそまうりてしふら給ふめされハせ
て二人あしうきるくきよあし居おのひじ
つひしりえあまきりしあしこれ
を長めわけぬえはよさうくと部等
と河越しとありけれハが船玄れ居ぬ

こころよりちりきいんと引ししそえ
まうりてこしうりしめてまるる武古
こもらぬ神とえ志母りもは
大屋後ハ故とが給くあまこれ園り
しアそそ故のこことんとうり給よと居
山ハおふ事なくとえしり東海とけ
ぬえししめてぬこら給とらうよおし
あししり給くは沙心れ中とあられ

ちほいしーせもさるひるる世孫人あれ
開のりりよしるるるこまじひ
ては祢ひひこまひえんをまし和
祢と祢してわひとのるり蝶此を
定長才四れあめてえとりー海しる
あよけ舟のあしりよるるあ京とらうあ
つげさりるは東三茶院ふよはゆり
結てそらんきよありるは開後らと
るを結ふとて

あまこひのあふさるる園のあふあ
とらを結さるりらりそしいうありる
は心のあやまを神母のうらまをわり
あつげて開のさうらまをたは
漢よああれいあふのあときこ
あしはよ昔天智天皇六年大和國
花鳥の文よりあふれ開志賀那

乃板いさし年紀よるりせお母して
杭嫩月とらららり萱海志の宿を
うらる尾浪國變田まよとらりぬ
うれも景行天皇の沙代りけ砒
よあも成うれ後ふ一糸院沙時大江
逆瀬とふ博古ありりり長保乃まよ
當國守あくくありりりる海介
大殺若を書てけまあくく御うとと

くそのらんらんよいしくけ死よま
備ぬ但又満より故郷へらんよ
其朝しくりくある信とか死より若ん
事我母のよあやと思念あられて海
かこよとららぬれいそくの辰神をひ
く友ありある時くおとら連らさ
ア二村山とも越ぬれい河國八しと
もりの娘よ左京の業年りか死つと

こやうりりれ八大臣殿

正郷と云く所 藤元殿とつるをみうを孫に
池田乃家ともうらぬはまをぬかひけん
と武吉ともえんをそまうりてらん神を
あゆりり信天龍河のしりりもななりぬれ
はふまうれハ私履とときうーめ原よ
と西園乃浪のうくのゆとひとあう
めーいーれり信かのあうれめれ我

あれ危きさうりもかとあゆーめれ
あてれや乃中よかり想風敷ーく
南ハ野うこよまりらゆようつる浮雲
よふ入る此して菊河とうらちと大
井河とれ流と信よ記家みこれく
あうれらんそらうこ河あゆーめーと
あうれなり字博の山よとちりぬれん
じうー業平の越鳥ー事とひらん龍

いつくぢるしむとしらぬめ給ひくは
見の関よかりぬれハ朱彦院沙阿
お門の討もよ字法氏歌郷忠文興
別へそりりは時け算よそ海りて座歌
と詠しり歌取よしそと海となく
たこ忠満よとつきぬれハ苗古れち根
ことん給ふうしむと想費ふれも
これ白くよんこわらりてうき鴻う系

母とさりぬむハうしむと東ぬと
はくと長浪ありハはくよりもさるを
えんこれみとりまけさめく一宮とあり
と一なりありあり小舟取よとあり
してむれ吾存るともらよおさうと
南ハ海上の面影こうして雲れ清いと
ゆりきぢのめ孤鴻も海ありよとあり
わはるよ遠帆定よ遠了眺るしりれ

とせりし〜心付く浦くよふが
やま〜り〜ん〜り浦く風松乃指
〜川〜じ〜海よ〜浮く蓮
葉の三乃島のこ〜くよありりなよ
〜て〜浮とハ浮浦とあつげあら〜や
渡河國よ平の松原ともは〜河豆國
三嶋の社よつ〜あ〜もけ社ハ河邊
國三嶋大明神と〜〜〜

〜き〜あ〜と能國入道河子守範圍
〜命よ〜〜〜り〜れハ
炎旱の天よりあ〜は〜は〜る
福系〜〜〜〜りよ〜り〜り
〜は〜人神の沙名あ〜ハ〜と
き掛〜〜と持〜〜お〜〜
あ〜れ〜箱根と〜打越〜〜下
よ〜り〜ぬれ〜谷川〜了〜志願〜

一 咽喉氏乃物説よ海のうりす
乃かとうれさい^急つるもお母しめかられ
て海せれあ人始くと九郎大矢判友華
ううさておけありけ人あそ
そころとこころなりくさあしれれ
はいよありして父子乃命やうな
法解よおして心しつうよ念佛や
せうすうんとの始くは命はうり

いもさしえあへ具れる^えた
てまらんそらん義徳の勳功乃賞よ
二 可れ少命や海の魚しとあゆ
るふしれれれ大信教うけし
お母しては海をあしあらんつが
のる踏うすまひな海を始なりも
おれ命よあうかとお母しえ
事とお母してあれな海をく

しらきんくわーん福村ともあきん
さてかゆくよつん結ぬ大信友父子九
郎大信判友くーんそまろてかまよく
くろり結ぬと廿院中食てはあけきあこ
かき原くーんあつまを結り信れきささ
おとれておのつーんこんれはてあこ
しんぢりあり九郎大信判友あや
の人のこあまそもあけありくれい海

て廿院の由事とはなをくーんまき事か
あひひよつんかき信交あゆーんその
まいりせて女奇れあまうくまてもえ
ゆりーんれりーんれんあまよつけ
てとまき愛しのえんおゆーんあけ
くんろーんあてあひとまのろりり
り信物乃中よと信物あゆまきよな
るよりてまいりせられりり信物あ

先帝の御夕出ひあれう葛橋よりも
出あそひゆくもとあり出ひ
志と悔うせ給ふは初んこれ出ひ
そよありは心と出らん
うかよとありは心と出らん
初めはうけうせ給ふは初んこれ
初んあひの道ハハり道ハハり
これとも心腹の事ハハり

うあて時く見ええまははら事
かかるとありは心腹の事ハハり
乃あひの道ハハり道ハハり
しえまらりていん
たのめあう治也年乃福ありとお
是は心腹の事ハハり
路しものせ極くくらすま
あこれよまハハり

者よあつとせたりし頼朝の運れあらん
禰ハ河事うはあつときと内くの給て十
八日また金洗澤よおれ給く其のら
ハう海々くハいれられとて大後とハ
これ一とありられハ二後後のをりし
あふ所の庭とぬこてこむひあふ屋よ
とくそまつりて二後殿ハすこれの中
より見かておあひ給く信満は月哉

と海一せとせとる信こころよ此金取
信良能員とりての給ひは信ハ平家人
人よさうよわさうしは意趣とあひい
とそまらる信そのと池殿あよれせんら
よりさせ給ふも頼朝の流罪よさう
めし事いんよ入さう女の信とんなり
それハ昔余年よえええしあゆりせれ
信しうとも頼朝よなり給て遊討と

まよーせんーとうなほつるうへにまよ
胎てちうくわいせえしくへんあうたれハ
ちうくわいせえしくへんあうたれハ
意ぢれ又いきんとわわわわ又あん
とわわわわわわわわわわわわわわわわ
負こののーんえんえん大匠後の所
まよまよまよまよまよまよまよまよまよ
てきて終り終り終り終り終り終り終り終り

の終ひは源平二の部より一まは胡部
よあーつるれてよりあはる源氏の
らうせきと平家よりて終へ平氏志
らうせきと平家よりて終へ平氏志
よ牛角れにしくまよまよまよまよまよまよ
あまハカれうんまわわわわわわわわわわわわ
悉よはささくまよまよまよまよまよまよ
せよまよの終ひは源平二の部より一まは胡部

ぢいじりとの伴よ東に若とあり平
家乃家人あり一者とあり之れつま
しきとてすはハハ子なりかしこ
ゆり給ひさへハ命乃いさ給んは
うやうくととゆらまひ給つとのれい
國あていらもとなり海もと一つみ
給ふつき人のこれまてさゆよひ給ふこ
えとつりあれとえくらくよとすは

あは人又海とありて力あよひ事よ
てあつとのと極虎を深山百獸夜恐及を
穿之伴揺尾而求食云本文有つけき
虎とほふよあは時ハとらて此獸威よ
おろ家人とと疎者よ柳ふ因て撫摩な
らよこめられぬらぬ人よむらひて尾
とゆりて食とすむらけ人おらんふ
れともかゆらよなりぬるうへとらと

かゝる事なれば大信殿もかくと八世は
よ一と事なり人もありなり
同十七日改元あり文治元年と改元する
大信殿以下の人々も改元と改元する
をて下乃也と改元するの事を知る
也ハさうなりと改元するの事を知る
と改元する大信殿も改元する事を知る
大信殿父子と改元する事を知る

り一と事なれば大信殿もかくと八世は
よ一と事なり人もありなり
同十七日改元あり文治元年と改元する
大信殿以下の人々も改元と改元する
をて下乃也と改元するの事を知る
也ハさうなりと改元するの事を知る
と改元する大信殿も改元する事を知る
大信殿父子と改元する事を知る

こと下意の目らと見してそのらなる
位も過なりやまへる海へとおられ
あゝとえよ遊却して女二日れあ
ひとありりれおひのありよ物を
り此起語文よりて二位殿へ是とま
らとて

源義経は恐申上り意趣者被撰抄代
官之其一為勅宣沙使澳胡歌頭累代

弓箭之藝習會稽之恥辱可被以忠
之志思外後虎口之謠言被黙心莫
右之軍功義経無祀而家各有功雖無
誤義沙劫氣之間流紅淚情業事意
良藥若以忠言送耳是也因茲被祀
謠者之實長日被入鑑余之間亦能述素
意能送教日當于此時永石奉拜向歌絶
肯肉同抱之既似空花運之極更歎

得又先世之業歎悲哉以余已父不再誕
後若誰人申披愚意之悲歎何筆不
被言象憐此事新申也雖以述懷更為
神髮屬於父母而地幾特節故教沙地
卿界之間成無實子被抱母之懷中赴
大和國宇多郡龍門牧之山某一日行時不
復安堵之息雖存無甲發命許京散之經
迴難派之間令流以諸國隱身於在之形

為栖邊古遠國令服仁古氏百姓而幸慶忽
純發而為平家一族追討令上洛平合誅
戮未曾義仲之後為責領平家或時戮之
叢石策駿馬為歎石顧已命或時漫之
大海凌風波之難石歎沉身於海底懸骸
於鯨鯢之腮加之甲曹為枕弓箭為業本
意併休已魂之憤歎逐年具之宿望
之亦無他事刺補任義經之任尉之業

當家之面目希代之重職何事如是式
維允今德深歎切自非佛神之沙助
者軍達德新因茲心諸寺祗祛牛王寶
平之表石梓野心之良奉請驚目本
國中大小神祇冥道維書近數通之起
禮文猶以無御省免我國神國也神不
可粟非例所憑非干地偏作貴敵廣大
之沙慈悲洞便宜令達高國被廻秘計

被優無誤之良頓芳免者及積善之餘
慶家門永傳榮光於子孫同年來之德
眉得一期之安寧自余石書盡詞併令
省暇水畢諸事歛被密沙賢祭義經
恐惶謹言

元曆二年五月日

源義經

大膳大夫殿

廣元二位殿子代一見事入多り

これハ如きより後を逃く事ありたり
やいふことありてまじいけりとも
事へくしてよきて軍功ハ公家此れよりい
たりともいお母世々れり判友ハ大后殿
父子ふけとりて六月九日京へのりて
娘ハ是れといふもけりんとも大后殿
おの娘つるよ都へくへのり娘へと
お母ともいふもけりんとも大后殿

娘よりけり京へてふみきりてよこえん
と母よこえともおもれり大后殿ハ
すうと目するもの事とすけ
きよよお母とけりんとも大后殿
と母ともいふもけりんとも大后殿
娘よりけり京へてふみきりてよこえん
と母よこえともおもれり大后殿ハ
すうと目するもの事とすけ
きよよお母とけりんとも大后殿
と母ともいふもけりんとも大后殿

きの上人やりばいふの事おぼし
 む信海一いさう水ありさゆとんえ
 ほつんとみくそまたらんとめん
 水よりかぬ一水一も成うまを
 給一よりこのこたのこ業いじ
 ともとたぬ一もくぢ一水門の水如
 むと並相伝一ゆさせ給なりとし
 の業氣一時この信おかりきいふ

かは事一あを給ふとせんせ乃水
 ともくこつちり世と人もうん
 お母一ゆさくす廿九年とすを
 給ふ家もおぼしめ一ゆさ給ふと
 夜乃夏のこけけのら七八十のよ
 とくこのせあふとも又福やハあ
 きうれハ佛このこととありて未
 得真元恒変夏中故佛説おし死長

夜と申す又我公自定衆福之觀心也
公法而能法之也ソ毎リ必ク之あり
定なれハ衆福之觀心也
法ハ内よりせんとせんと定也
と云んハ修るハ修るハ事
なれハ事とあるなりと云
めと云ハ修るハ修るハ事
来なれハ必切らあはし
思惟ハ

かこ能ん事ハ
らと引攝ふハ
値ハ能ん事ハ
ひれて
ん
心
く
見の
事ハ

う乳爰ぢりも得る〜ぢりも月鏡像
ぢりとおのふ〜とゆ〜き伴のれが
意めて整虫をわといふふあり寸間
寒、昔吾宅煥公只暗敷やらうの小虫
のうにせと〜とふ一寸のれ伴よあり
是れ死を常の間ぢり事、成志は
えり人う〜ておれと〜りと〜り〜め
さぢり〜き〜は〜こ〜ん〜は〜

ま〜んとお〜り〜て縁念と〜を
〜す〜て戒と〜り〜せえ〜り
念佛と〜り〜ハち屋敷〜よ
む〜ひ〜れと〜せ〜余〜と
めて念佛〜〜二三百〜り〜
り〜橋石馬允公長う子〜橋三良公忠
ちり〜ぬ〜大屋敷の〜り〜
ろ〜ま〜り〜念佛と〜り〜

よ〜よ〜この終りなほい〜このさ〜い
お〜う〜なよ〜ゆ〜い〜ま〜怒〜よ〜と〜ら〜り
〜りよ〜人と切手れん忠七ぢら〜い〜きわ
〜と〜さ〜げ〜き〜と〜の〜あ〜は〜れ〜と〜も〜い〜う〜て〜う〜阿
〜れ〜と〜が〜も〜ら〜う〜な〜(き〜い〜ら〜ん〜や〜ん〜た〜ハ〜平〜家
〜を〜代〜相〜傳〜の〜家〜人〜新〜中〜納〜玄〜の〜所〜と〜胡
〜夕〜志〜う〜の〜さ〜や〜ら〜い〜ぢ〜ら〜り〜せ〜よ〜あ〜る〜ん〜と〜ぢ
〜ゆ〜い〜と〜う〜さ〜て〜れ〜れ〜と〜え〜と〜ら〜な〜は〜い〜と〜た〜い〜西〜園

あ〜て〜い〜く〜さ〜い〜仲〜よ〜九〜郎〜大〜久〜判〜友〜よ
は〜き〜い〜ら〜り〜ら〜る〜昔〜や〜え〜の〜ら〜ち〜傳〜の〜骨〜と〜又
よ〜人〜と〜れ〜の〜い〜〜〜〜戒〜と〜の〜い〜せ〜な〜り〜て〜念
〜御〜と〜し〜め〜り〜ら〜な〜は〜よ〜大〜臣〜殿〜の〜家〜傳〜の〜所
〜あり〜う〜ゆ〜い〜ら〜と〜さ〜ら〜い〜海〜〜山〜は〜な〜ら〜ん
〜さ〜い〜嬉〜ら〜る〜い〜え〜か〜れ〜〜と〜れ〜め〜え〜〜海〜
〜ま〜し〜つ〜と〜よ〜人〜や〜と〜れ〜ら〜れ〜ハ〜海〜と〜い〜
〜う〜ぢ〜ら〜〜な〜た〜お〜傳〜〜と〜え〜ま〜ハ〜さ〜く〜い〜の〜終

ひるれもえん大浦跡をた切より
九郎お人判費あひりして重人のわり
後ねむらりてい公忠うさくあ人大臣
ち藤の巻と一あふようりみてりりさ
—とほこ少くの巻りれかくしてり
むうんととふとおろりなり故所理大
久経威のちやう—皇依文亮経西
山のここの大匠淨通の麻孫鳥飼中納言

のれじとあとうやりのうらよあさいよ
なりふ若志とり—りりに和守乃おく
あは一あよあひてとり—るよ武士に
はひりして—ふ六条河原あてりひ
ときりてりり初り梅—大京上人こ
の種初月くあはなれあひとみく無
夢とえんせんおほりて河原あてり
ま—りりあよ武士ふ六條り種物あ

具しそいできこりたれは上人世のあり
ゆらことしそきくよ物具をいはるもの
おあするこせあやしくれはかほして
目をつけて見接く髪育のまこりなる
よりきんこいけさなはと武古より
いのりよこいせりちかきんよけし
かてもやしくとちれ接ふそのしら
くら葉の交まはは女房年廿二こと

おほしきりあのみよこちくは
うありししきぬもかひよか
うらちしとれさりたれのらあ
きぬもぬれうらちしもさうほめ
しよこ忠とそとあこらよこ忠ハ
あそしるむ女わうあり上人あれハ
うあこん接ふよ武古あのみりきみ乃
ひとやそくきりてあ原よせえり

おうれりれハもやういふともしんすこ
くもんのももけられまかの甘房よあ
くひとさうりてあよこーあをせてあま
あは事なれハあやぢれしあ結んあ
こしきそらあおうれきとの抱るあ
よこいれあよまともあつとせと
あしとあれくうしてさうーああ上人
うらうとさうりよとあけりあがるうれと

見てまらうあめりてのあひああハあ
はいうああああああああああ
しー人の死のあんとあめらくあありと
しーともああああああああああ
人あしああなああああああああ
もう人あらん事ああああああああ
あれああああああああああああ
ああああああああああああああ

身とは海東のうつしに流る身と上人あ
ひとも大ぢくくをさひらひらとさ
てきあうとよき念佛してほれ女房
のりら流るりるかしくと流るもの法
師よもしこせていとうせ流る小宗とて
くしそそまうり流る小宗れあ遠院へ
とくりと流る女房やうか家世
まよるりかうへとハかこりりりへ

あつれよるりそのら流ることあり流
んと上人流のうし天をよまといふ
流るり流るよ大門よりららと流る
のまて流るのあよとら非人あり
りり因を食れ伴よと流るら流其
流る流るらよおう流るあかう流
とりらあらう目教あかまにその香は
のあまらと流る其うりら流る人これとく

くせうは福よ一一人せうくせう
くせうよ一人せうくせうてんせうのせう
せうありくせうよ一人せうんせう
せうありよ一人このあまのせうせう
よ同じあまのせうせうせうあり
くせうのくせう一人せうくせう
ろよおせうせうのせうのくせう
ありよ一人せうせうせうとせう

くせうのくせうせうせうよ次の目
せうありよ一人せうくせう
くせうよ一人せうありくせうあり
又くせうせうせう一人せうせうせう
くせうありくせうのくせうあり
のくせうありよ一人せうせうせう
くせうせうせうせうハせうよ一人
のあまのせうせうせう一人

昔の卯時祝よわこぢく人のうゝのうゝ
あてらよよむひて言被り念佛
やつる年の時つりりしうゝより
あそぢけてぬるうんをらあんく
しつゝきやうらんしつゝきやうん
らうきやうきくぬとさやうひり作
ぢりよるれハ上人もさぢく人
とりましつゝのあそぢかあけて付

あうしきやうとよそ念仏中ぢく
のらよくしあまれぢくしとら
祿給れハありし時河原あそぢ
て小原へうり出都せうあてし
るあ女あうぢりそそしつゝきやう
あそぢくぬるは人後洋道の出まこ
鳥飼中細えれれしとあそ人ぢりよ
うりあれありし事ともぢり

本之位中將と八南都のち元の中(町)
々ひとまきりて奈良坂よりかく食ひて
源之位入道れよりく就人大夫数重
うまほてくよりくふ人のあはきやう
ハソれそそまらうと醜醜海と南都
とリ一まきりりな坂ちさそとひ
くは柳のひほくさるるくかきん和
ゆまよい海一あれよはよのれこ

ちういふことと海一まきりる三位中將
う一そまらうと武吉もにちく
くのほくははう一り目もなまけ
とけあれはは事ありこ
と一まきり一あれ一八家後
のそんちかうむ入る事あり年こ
らあひう一り一もの目野大綱
のほりゆとて母府のあはとまきりま

一ふかき思ふ事いふらんしんを
とまりふいづよ我一人の子はられんは
せしおのひおくしき事なれにあら
のらよりしてよこちを感てく
趣しやとてお母に想とこの終は武古
ともさすうよ思ふなれは祢はあのかは
うこそなりしてなふはなれしん
とてゆきしりてり之位仲おもとあ

て悦びてわの大夫人之位の居れも
とくたつ子とりしまり之位は
とすハハ桑大納言邦徳卿はれし
や平家朝とあり終し時人この
よち成りけて西園より終くゆ入終
れともおとら入終ふしき事あり目
大夫人之位者ハ三位仲おの
とりしれハかのわよ思ひてと

備へり家内より祿入て大納言典侍殿
ハこれより上りて世給ふる三位中納言
下りて後り此へ東國赴ておかしなり
く此は家内南歌を母より習ふなり
元後のもくしこれ此はさしあへん
系せんとしてこれより此へおかし
と備へりしと知りし給ふる後れ此へ
下りて此は備へりて是給ふるに
おかし

なり侍交きいば人のやせらるる
んよい給ふる家内と見え給ひ
うりたるよいうもやあつうつこれへ入せ
給ふるの給ひり家内と見え給ふよ
位中納言
もえりあせらるる大納言典侍
目もこれおかしもきしてものも
おかし

ふみ見えそまらば事のかたあひいふ事
ぢやくじやくれきんぞくししてまゝして
すうーつるふみありてんこふそまらりん
あてまらる事こそうれーうれふま
とのひつれハゆーやふおひつるこめと
ありつるふみそらふまらりあてまらる
心事もふれーこまそあれはふれ心
くーあひつーあれ事ものほひハ

ふみよしげとあれーこのゆくぢりゆ
うりてぢくさ心事ハぢー目減さぬ
あそつらぬよゆゆく魚はあつて福ふ
まは武古よものいけとけまらそあ
ん心事とらなれハうれーとんそ
まらりゆまはよまらやまゆりあん
まのほてそらゆーあれーいたまら
らりしあふまらゆまらゆまら

くうー武古とみまら一取のいぬをさ
らむの幸さの年久入り接んは海と
のまれとみまら十年あは海接んす
とと海くすあひいこれはありし
りーくそそ三後仲おの地神よそりつ
き接ひて庭の面もそか接ありりれこ
とさりそそあそきりーあそ祢ハそそ
三後仲おちりく一りりれそそ出接ひ

ゆれともこのそそ急そめ接んてりり
接よじせひ接ふ武古とみまらそそ
られ神とそそりり大納言典侍接
そそそそそそそそそそそそそそ
りれそそそそそそそそそそそそ
接一接ふそそ接のじーそそそそそ
高社のためよ頂羽そそそそそそ
接いそそそそそそそそそそそ

うら心うら物くおひるは虞氏うら
落途きてそらひよまよとわりの別
とがーみ結しよ歌うらうせわおは
よーきあえしうらうくわれ結ひつ
落つ結らんここれよまよしとを思
しこれハ蛇暗殺の虞氏後夜涼の面楚
歌とよ詩とよと月一あせつひ
しのおゆしやうゆくちつ死れハ新

野地とうらてて光明山の鳥長れま
よと結ひぬらハ詠歌に年六月高
念まれなれまよあうりてうせを結
たよしとと結ひるはよとわらぬら
ひとわらしてあれとよよがあまら
也又六葉とうらと結ひるは源之流入
道の一門おゆく畜家歌とわらりて余
とうしあひよとあまらぬらよと

いしきまうりこいこいおとすよ
ておのりのうしきまうりこい
はなともはなうりそはなせうりこい

いしきまうりこいこいおとすよ
ておのりのうしきまうりこい
はなともはなうりそはなせうりこい



